AJU コンビニハウス 会報

編　集/コンビニの会事務局
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町147番地
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人
コンビニの会

定価/150円
昭和54年8月1日第三種郵便物承認

第152号

1年前のミャンマーの家庭にて　2020年2月撮影

アジアの笑顔にまなぶ

写真家　長谷川 友子

ミャンマーで、今年2月1日、国軍によるクーデターが起きた。その理由は、アウンサン スー チー氏が率いるＮＬＤ（政党）が、昨年11月の選挙で圧勝したことに対して、選挙違反があった事を理由にあげている。そして、スー チー氏に対しても、無線機の無断輸入の罪で拘束をした。それに対して、市民たちは、民主化の意思を示すためのデモを計画。しかし、国軍は、そのデモに対して銃を向け、１００６人（8月19日中日新聞）の人が亡くなっている。１９８８年（8月8日）にも、同じような民主化デモが起き、学生たち１０００人以上が国軍によって射殺された（今も「８８８８」と語り継がれる）。

今年7月30日に日本で開催されたサッカーＷ杯に、ミャンマー代表がグランドに並んだ時、「誰も国歌を歌っていません」と。そして1人の選手が民主化の意思を示す3本の指を立てていた。恐怖と不安がいっぱいの表情に見えた。

（次頁へ）

そして会場の外では、在日ミャンマー人のグループが、『帰れ！』とシュプレヒコールを繰り返していた。ミャンマー国軍が送り出した選手だからだ。

知人のミャンマー人で88年の民主化デモの時18歳だったデモ逮捕歴のある彼に、両親はお金とパスポートを用意して「日本に行くように」と。そして彼は、日本でミャンマーの民主化運動や難民支援の活動を続けた。そして、3年前に日本人の奥さんと子供2人を連れてミャンマーに帰った。そして再び今回のクーデターに。88年のデモと大きく違うのは、現在、デモの中心にいる20代前後の人たちは、軍政時代と、5年間程の民主化時代のどちらも経験している。2度と軍支配の政治には戻らないという強い意志を持つ。そして、50歳前後となった88年民主化世代と連帯している。

シュエダゴンパゴタ　ヤンゴン

雑記
ごまめの歯ぎしり

ＡＩの技術で安全運転

娘が車の免許をめでたく取得し、早速我が家の車を運転してみることになった。小一時間のドライブで助手席のこちらが気疲れでヘトヘトになってしまったのだが、右折時、初心者マークに気づいた対向車の市バスが何度もパッシングして「先に行って良い」と合図してくれるという温かさに触れる場面もあった。とにもかくにもくれぐれも安全運転をと願う。

若者の運転事故と共に高齢者の車の事故も問題になって久しいが、そろそろ車の運転を止めたら～と心配する子供らの言うことを素直にきいて免許返納をする高齢者ばかりではない。車がないと一人で自由に出かけられない人も多いし、更新時等に「あなたはもう運転すると危ないですよ」と線引きするのも判断が難しい。我が家は義理父を交通事故で亡くしていることもあり、難病を患っている義理母の更新時に免許返納を考えないかと話し合ったことがあるのだが、こちらの心配は全く受け入れられなかった。その時私が平針試験場に問い合わせたのだがその回答は、運転席までどんなにヨロヨロと歩いてきても、ある程度運転出来れば更新は出来るとの回答だった。しかも今までの長年の経験があるので、仮に少し判断機能等が衰えてきていてもある程度は問題なく更新となるようである。となると、免許返納を呼び掛けるより、車自体の安全機能の技術が進歩していく方が事故防止には早道かと思った。

車の技術に限らず様々な分野でＡＩ等の進化が目覚ましいが、技術が進み運転者の判断や操作だけに頼らず、どんな人にとっても車が楽しく走行できるようになる日が一日でも早く来ることを願う。

（会報委員　鈴木　奏子）

全職員研修２０２１
ケースワーク

生活支援部　現場総合主任
溝口　愛

２０２１年２月、グループホーム入居者のＴさんが亡くなりました。入退院を繰り返しながらも亡くなる数週間前までグループホームで仲間やご家族と過ごすことができました。

エゼル福祉会として終末期の方の支援を行うのは初めてのことで、Ｔさんは私たちにとても多くの課題を投げかけて逝かれたと思っています。

Ｔさんはパルハウス開設当時からグループホームに入居され、年長者として他の入居者を時には引っ張り、時には見守ってくれる存在でした。通所施設ＷＩＬＬでは製菓グループの『工場長』として誇りをもって仕事に取り組まれていました。また、二十歳の時から三十年以上人工透析を受けておられ、週の半分はＷＩＬＬ、半分は病院に通う日々を送っていました。

２０２０年夏に新たな病気が判明し、徐々に食欲がなくなり入退院を繰り返すようになっていきました。コロナ禍で家族でさえも面会が難しく入院中は誰とも会うことができないため、入院がしだいに嫌になり、Ｔさんは最後はぎりぎりまで「病院」という言葉を口にしませんでした。グループホーム担当職員は、プレッシャーを感じながらも「入院はしたくない」というＴさんの希望に応えたいと必死に奮闘していました。その甲斐もあり最後まで仲間や職員、家族に囲まれて過ごすことができたと思います。

本来であれば、法人全体でＴさんの最期について「がんばったね」「よくやったね」と言い合えることが理想だと思います。しかし「最後までホームで過ごせてよかった」と思う一方で「最後に〇〇さんにも会わせてあげたかった」「もっとＴさんに関する情報を教えてほしかった」などできなかったことへの後悔や課題を口にする職員も多く、グループや部門によっても感じていることに大きな隔たりがありました。終末期の支援は本人の支援はもちろん病気への対応、他の仲間への支援、他部門・他職種や親御さんとの意思疎通や連携など、とても多くの問題が絡み合っています。これらについて、できたこと・できなかったことを整理し皆で共有していかなくては、今後もバラバラの支援になって

いってしまうと危機感を感じました。

課題を整理し共有していくためには通所部、生活支援部合同で行うことが大事であると思いましたが、どう全体で整理していけばいいのか私にはその手立てがありませんでした。エゼルの職員集団はまだまだ未熟で、残念ながら自分たちの手で課題を整理することは難しいと感じ、長年お世話になっている廣瀬先生にケースワークの進行役をお願いしました。

Tさんの支援の経緯を詳しく伝えていくうちに、廣瀬先生から厳しいお叱りの言葉を受けました。何をおいてもまずは「本人が中心」であることを廣瀬先生から繰り返し教わってきましたし、それがエゼルの理念でもあるはずです。大きな課題に直面した時はまずはケース会議を開き、本人の思いなどを皆で書き出し話し合いながら、大切にすることを確認し合ってきました。しかしTさんの支援については「病気」に大きく気を取られ、「Tさんの思い」をきちんと全体で共有する努力があまりにも少なすぎました。基本中の基本であることを疎かにしてきた事実を突きつけられ、とても情けなくやるせない気持ちになりました。しかし、次に進むためにはできなかったことにきちんと向き合わなくてはいけません。この課題を皆で共有するにはやはり廣瀬先生に来て頂くしかないと思い、幾度も廣瀬先生に連絡し、講師をお引き受け頂きました。

全職員研修のケースワークに参加した職員2名の感想をお読みください

生活支援部　職員　馬渕　雄規

Tさんの終末期支援に関わり今回いろいろな問題にぶつかり、自分がいかに無知だったのを知りました。自分なりにネットで調べたり、終末期の病棟で働く看護師の友人にいろいろな話を聞いたりしてほんの少しですが、知識は入れたつもりでした。いざ支援に入ると想像以上に大変な事が多く、現実は厳しかったです。今回廣瀬先生のお話を伺い、気付かされた事が多く、改めて難しいターミナルケアを手探りでよくやっていたなと思いました。

グループホームの職員に比べれば支援に入る機会は少なかったですが、それなりにいろいろと考えながら支援できたのではないかなと今は思っています。とはいえ、学生時代から長年支援に入ってきた利用者さんが

日を追うことに弱っていく姿を見ながら支援していくのがとても辛く、自分では受け止められない気持ちもありました。亡くなってしばらくはあそこで〇〇できたのではないか…〇〇したいって言っていたな、やってあげられなかったな…と後悔と反省ばかりで自分をマイナス評価しかできなかったのです。

今回の研修で他の職員の意見をたくさん聞いて悔やむ事や反省ばかりではなく、今後を考えて前に進めるように整理しなければと実感しました。たとえば通所の職員の話を聞いて気づいたことですが、病気がわかってからはいろいろ準備をしてそれを実践にうつす事に集中してしまい、他部門への報告等が疎かになってしまっていたのだなと。Tさんがほとんど通所できておらず、コロナ禍という事もあり、通所部とは文章だけのやり取りが増え、対面で相談したり、報告したりするタイミングを逃していました。その結果、言葉の捉え方等ですれ違いが多々あり、溝ができてしまった。一人の利用者さんを支援するのに皆の考えがまとまっていなくては良い支援ができるわけないし、もう少し冷静に物事を見るべきでした。

この数か月Tさんが亡くなった事に対してどこか逃げてきた部分が多かったのですが、今回の研修でやっと向き合えたのではないだろうかと思います。廣瀬先生は違う意味を込めて話してくれたのかもしれませんが「良くやっていたね…」という一言でなにか救われた気がしました。

Tさんと関われた事は自分にとってとても成長のできた大きな一歩だと思うので今回の経験を心に刻み込んで今後もいろいろな利用者さんと関わっていきたいと思います。

生活支援部　職員
宇都宮　正子

「もうすぐ誕生日だ」入退院を繰り返しつつもパルで過ごし、最後の入院の三日前、会話の中でまだまだ先の誕生日を楽しみにされていました。痛みでしんどい時や、朦朧としている様子の合間にも、TさんはTさんだと感じられる言葉でした。

「親亡き後の生活」総括を行うと最近はこの言葉が多く上がってきますが、いざターミナル期の方を支援していくにあたって全くイメージできていなかったと思い知らされました。

前年の九月、Tさんが退院してお母様が「春は迎えられないって…」と涙を浮かべて話して下さいました。その言葉にどう返してよいか分からず、Tさんとのお別れが近づい

ていることの事実をすぐには受け入れられませんでした。ですが当の本人は退院できたことがうれしく、おやつのパンをほおばってあっけらかんしている様子。この直前に事務室のみなさんから退院祝いにハートやクマの形のたくさんの風船を袋一杯預かってきていたことで、寒気がするような苦しい気持ちの中でも、Tさんを想っている人が周りにたくさんいることへの心強さを感じ、少しでも長くTさんのやりたいこと、したいことをできるようにと思いました。

病気の詳細を本人に知らせないという選択は私も賛成でした。この先の事をTさんに伝えることは、本人の不安を大きくさせ今の生活を混乱させてしまうのではと思ったからです。ですが、今思えば、余命を具体的に伝えることでなくても、これから起こるであろう症状について早いうちから本人と一緒に考えていくこともできただろうと感じ、病気の詳細を本人に知らせないことに賛成だったのは、私が重い病に対して積極的に向き合うことへの怖さがあったのだと思いました。

自分だけで深刻な状況を抱え込んで、間違った判断にならないようにと引継ぎは気をつけてやったつもりです。ですが、引継ぎの時間が別の話題になる事も多く、段々とフェードアウトしてしまいました。Tさんの事よりも自分の気持ちを優先してしまい反省しています。

そんな中でも、パートさんたちはとても頼もしかったです。Tさんを気に掛けつつも、他住民のことにも気を配ってくれ、今までの見知った人たちに囲まれて過ごせたのはTさんにとって大切な時間だったと思います。

今回の研修を通して、私は「みんなと一緒にやって行きたいな！」と強く思いました。もともと私の性格上、みんなで〇〇する…というタイプではないのでこの自分の気持ちの変化に驚いてしまいました。ただ、年々生活支援部と通所部、ホーム職員と他部門の職員との距離が大きくなっていることにもどかしさを感じることは多くありました。以前「そちらで(ホームで)決めたものを教えてください」と言われたときは今まで一緒に考えて進んできたはずの職員と壁ができてしまい、突き放されているような印象を受けました。仲よくとまではいかなくても支援に支障をきたさない程度に関わりを持てていればと思っていましたが、今はもっと他部門の職員一人ひとりに興味をもっていかなければと感じます。

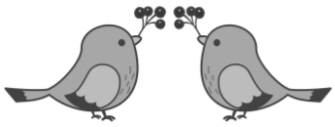
《活動状況》

7月

1日　新人オリエンテーション
3日　重度訪問介護従業者養成研修
5日　名古屋市社会福祉協議会　マナー研修
（土田・犬飼・伊藤・松本・田原）
6日　職員交流研修（生活支援部・通所）
10日　全職員研修
12日　全障研研修（宇都宮）
13日　コンビニの会総会
14日　連絡調整会議
16日　名古屋生活支援事業所連絡会総会
（渥美）
16日　名古屋市社会福祉協議会
新任職員基礎研修
（岩下・犬飼・伊藤・松本・田原）
16日　通所部主任会議
21日　防災会議
21日　会報発送
22日　生活支援部主任会議
22日　通所親の会学習会
22日　通所祝日開所　WILL パン作り

8月

2日　サービス管理責任者基礎研修（大森直）
4日　会報会議
6日　ＷＩＬＬ　盆踊り大会
7.8日　社会福祉士指導者講習（溝口）
9日　通所祝日開所
10日　担当者会議　（榊原）
11日　連絡調整会議
18日　生活支援部主任会議
18日　名古屋市社会福祉協議会　会議記録研修
（鬼頭）
18日　通所部主任会議
24日　名古屋生活支援事業所連絡会会議
（渥美）
27日　サービス管理責任者更新講習（寺澤）
31日　サービス管理責任者更新講習（佐藤・久野）

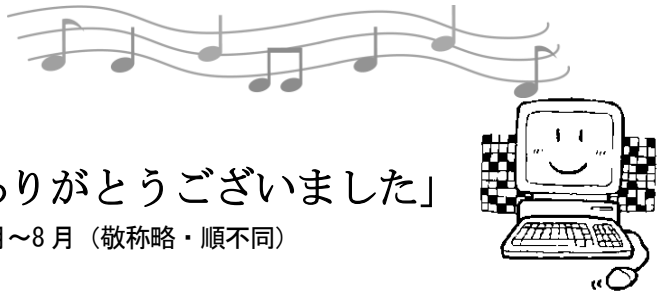


事務用品のご寄付を頂きました

大塚商会様よりボラみみ様を通して、
マグネットクリップ95個とバインダー1個をご寄付いただきました。

活動の場や事務所で使わせていただきます。ありがとうございました。

事務局コーナー



「ご協力ありがとうございました」

7 月～8 月（敬称略・順不同）

★　ご寄付いただいた方々

（ＮＰＯ法人コンビニの会）

河内裕子　杉浦正敏　山田肥名子
佐野　環　中島温子　塩澤しのか
高橋勝也　近藤直子　渥美　弥
伊藤勤也　奥田みち子
加藤史子　名和真由美･芳恭

※会報購読料１万円以上お振込みの方

★　物品寄付をいただいた方々

（生活支援部）

佐藤慶太　原あゆみ　渡辺世津子
宮川優子　榊原義典　松本浩希
㈱東名メンテナンス

（ＶＯＬＯ）

塩澤しのか　久保昴太朗
長野資子　　川島秀信

（ＷＩＬＬ）

浅井宏紀　佐藤慶太　小出朱里
丹羽恵子　松村定彦

★　活動にご協力いただいた方々

（生活支援部）

石原正寅　辻本道子　東原光江
北原菜見　大森　信　石原まち
寺西　剛　鈴木千春　榊原さち
和田遥香　村上梨央　清水柚衣
田村淳仁　西川昇吾　酒井まみ子
川口侑里　中村早希　戸部アスカ
吉田恵美　長谷川美緒

★　会報発送ボランティア

半田素子　佐藤美紀子
丹羽正子　吉田嘉子

ＶＯＬＯオリンピック

通所部　ＶＯＬＯ職員
有満　義昭

コロナウィルスによる自粛は、通所施設の日々の活動にも大きな影響を与えています。密にならないような感染防止の徹底は同時に、活動の大きな制限になるからです。しかし、通所施設に通う仲間たちに「楽しみ」や「喜び」を提供していくのは職員の大事な責務です。日々模索する中で、室内で楽しく一体感を持って過ごせる活動は何かと職員間で話し合い「ＶＯＬＯオリンピック」を開催することとなりました。当日は午前にオリンピックに纏わるクイズ大会を、午後はボッチャ大会を開きました。大いに盛り上がったオリンピックイベントでしたが、その中から一番印象的だった大会の結果発表、メダル授与の時の様子をお伝えしたいと思います。

紙粘土で利用者たちと一緒に作成した「金、銀、銅」の特製メダルを授与出来るのは、クイズ大会で好成績を残した3名と、ボッチャ大会で勝ち残った3チームのみです。

メダルを獲得出来た人も、そうではない人にも共通して言えることは、日々の活動の中で、優勝を勝ち取るようなゲームがあったとしても、反応が薄かったり、直接的なリアクションが少ない仲間も、今回のイベントでは沢山の表情を見せてくれたことです。特にメダル授与の瞬間は、よい表情をしている仲間たちが沢山いて、多くの拍手と歓声の中で受け取るメダルは「主役」になれる瞬間でもあったと思います。目を大きくしたり、照れくさそうな表情を見せてくれた仲間たち。一方でメダルを受け取れず残念そうに下を向く仲間。そんな姿を見て、改めて一人一人が、活動の中で主役になれたり、共に喜んだり残念がったり出来るその時間こそが通所施設の醍醐味なんだと思いました。外出自粛はまだまだ続きそうですが、主役になれる瞬間を仲間たち一人一人と向き合い見つけていきたいと思います。

手作りのトーチを持って
VOLO 内を ZOOM 中継しながら
聖火リレーしました♪

メダル授与式～おめでとう！

狙いを定めて・・・ボッチャに集中

盆踊り企画！
「ハイ、ちょちょんがチョン！」

エゼル福祉会
理事長　大川　美知子

授産活動ばかりじゃつまらない、夏らしくて楽しいことを・・・障害のある仲間と職員の意見が一致して、ウイル作業所でリモート盆踊りの開催が決まりました。

本番の2週間前に「先ずは形から・・・」と言うことで、浴衣や甚平、はっぴの準備に取り掛かりました。「うちの子は浴衣を持たせますから」「私は花柄の甚平スタイルで・・・」と盆踊り大会以前からワクワクしながら準備を進めました。

盆踊り大会（8月6日が）近づくと、浴衣の着付けをどうにかしないと、「職員だけでは着付けは無理だよ！」となり、帯を結べるボランティアさんを探すことになりました。

以前にウイル作業所で働いて下さっていた方にお願いして着付けボランティアの確保もクリアでき、当日は、午前中にＹｏｕＴｕｂｅの動画を見ながら輪になって「炭坑節」「ダンシングヒーロー」「一休さん」を練習しました。

始まりは「ハイ、ちょちょんがチョン」の手拍子から。

次の動作は「掘ってエ、掘ってエ～また掘って、かついで、かついで後戻り・・・」みんなで掛け声をかけで大盛り上がりです。一曲、終わるたびに「ヤッター」「イエー」の歓声が室内に響き渡っていました。

牡丹柄の甚平や、真っ赤な祭り半てん、有松絞りの上等の浴衣や藍染めの男物の浴衣にへこ帯や角帯をきりりと締めて素敵な若衆姿での登場に歓声が上がります。

更に女性職員の発案でヘアメイクも・・・１００円ショップで買って来たと言う花を女子全員の髪に飾ると、見違えるような可愛らしさです。

さあ、いよいよ本番となった時に、きょうされん愛知支部からリモートでの盆踊りが始まりました。リモート参加の申し込みができなかったウイル作業所は蚊帳の外に置かれて、単なるリモート盆踊りの見学者になってしまいました。

「♪踊る阿保に見る阿呆♪」と言うけれど、「やはり盆踊りは踊れたほうがいいわ！」と言うのが、仲間たちみんなの感想だったようです。

「来年の夏はもっと上手くやらなきゃ」と職員。

コロナ禍の夏の思い出でした。

※次ページに盆踊り大会の写真があります

【銀行口座】三菱ＵＦＪ銀行　小田井支店　店番 238　（普）　口座番号　1440108
特定非営利活動法人　コンビニの会
【郵便振替口座】番号　00800－2－35190　コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。
障害のある人たちの地域生活を支援する
特定非営利活動法人
コンビニの会
理 事　宮川　優子

〒452-0822　名古屋市西区中小田井 2-431
コンビニハウス　Tel (052) 502-7731
Fax (052) 505-6082
ＵＲＬ　http://ezeru.sakura.ne.jp/
E-mail　convini@beach.ocn.ne.jp

発行所：東海身体障害者団体定期刊行物協会　名古屋市中区丸の内 3-6-43　みこころセンター４階